古代メソポタミアにおける神名の解釈学

——シュメル語シュイラ祈祷 **ur-sag úru ur₄-ur₄**

「勇士, 逆巻く洪水」におけるマルドゥクの名前と称号——*

The Hermeneutics of the Names of
Deities in Ancient Mesopotamia:
The Names and Epithets of Marduk in the
Sumerian Šuilla-Prayer **ur-sag úru ur₄-ur₄**,
“Hero, Devastating Flood”

柴田大輔^{**}
SHIBATA Daisuke

ABSTRACT The explanation of names of deities played a significant role in the theology of ancient Mesopotamia. The most important example of such an explanation is *Enūma eliš* VI 121-VII 144, where Marduk is invested with his fifty different names, alongside “explanatory epithets” which interpret each of the names. The significance given to the names and explanatory epithets in the ancient theology can be seen, above all, in commentaries to *Enūma eliš*.

The present article deals with a hitherto overlooked example of such explanatory epithets of Marduk, mentioned in the Sumerian Šuilla-prayer **ur-sag úru ur₄-ur₄**, “Hero, Devastating Flood”. In the litany of this prayer Marduk is addressed with names which belong to the fifty names in *Enūma eliš*. Each name is followed by an explanatory epithet. Based on comparable evidence from explanatory epithets in other texts, the way in which these epithets stem from the names of Marduk will be analyzed. In light of the editorial history of the prayer and the purpose of its recitation in cult, the reason for the mention of the names and epithets of Marduk in the prayer will be further investigated.

** 日本学術振興会特別研究員

Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science

I. 古代メソポタミアにおける神名の解釈学

人類の宗教史上、最も神学的関心を引きつけてきた議題の一つとして、信仰対象となる神を指す固有名詞、すなわち神の名前が挙げられる。その取り組み方は様々だが、神の名前をめぐる熾烈な神学的議論は普遍的に確認できる。古代メソポタミアにおいても、諸々の神々の名前は当時の神学者の関心を引きつけて止まなかった。特に、前二千年紀後半以降に記された文書は、当時の神学者達が神名の分析によって当該の神の持つ技能や特性を明らかにしようと試みていたことを伝える⁽¹⁾。

そのような試みが古代メソポタミアにおいて盛んに行われたのは偶然ではない。これは、古代メソポタミアにおいて用いられた楔形文字に多分に依拠している。楔形文字は、前四千年紀の終わり頃、ある言葉、おそらくシュメル語の表記のために表語文字として誕生した。その後、楔形文字は、音を指す表音文字としても用いられるようになった。これにより、他言語表記のための道を開いた。特にメソポタミアでは、セム語系の言語であるアッカド語（バビロニア語・アッシリア語）の表記に用いられた。その後、紀元前後の時代まで、楔形文字は古代メソポタミア世界における主要な文字表記体系として使い続けられたが、その表記法は合理性とはほど遠い。楔形文字体系を構成する諸文字は、大抵、複数の音もしくは語を指す。また、ある特定の音もしくは語を表記する文字も複数あることが多い。このような楔形文字の非合理性こそが、楔形文字文書の解読に取り組む現代のアッシリア学者を悩ませる主な要因となっている訳だが、古代の神学者は、ここに壮大な神学構築の契機を見出した。神々の名前も楔形文字によって表記されていたため、名前を表記する文字の組み合わせは、理論的には様々な仕方で解釈できた。神学者達は、名前を構成する文字、もしくは文字の一部をあるシュメル語の言葉と解し、それぞれアッカド語に翻訳した。さらに、それらのアッカド語を組み合わせることによって当該の神名を説明する称号を作り出した。

現代の文献学から見れば荒唐無稽なこのような試みは、メソポタミアの神学をダイナミックに築く重要な方法論の一つであった。古代メソポタミアの学者、少なくとも前一千年紀の学者は、伝承された宗教文書をただ闇雲に書写していただけではなく、その「意味」の理解を試みる一種の解釈学の伝統を構築して

(2) いた。語の多彩な解釈は、そのような伝統における重要な技法の一つであり、
 神名以外にも、神殿や都市の名前、あるいは宗教的に重要な用語の説明のため
 (3) 用いられた。

神名の説明的称号は、様々な神々の名前に付記されているが、特筆できるの
 (4) は『エヌマ・エリシュ』におけるマルドゥクのケースである。周知の通り、は
 じめ一地方都市バビロンの神に過ぎなかったマルドゥクは、この都市の政治的
 地位が上昇するに伴い、より上位の神として祀られるようになった。そして、
 遅くとも前二千年紀末以降、最高位の神と見なされることが多くなった。この
 ようなマルドゥクに関する神学を最も顕著に伝える文書が『エヌマ・エリシュ』
 である。合計七枚の書板から構成されるこの文書は、若い神マルドゥクが敵対
 する太古の女神ティアマトを征伐することにより神々の王に即位し、世界秩序
 を再創造したことを取り扱った物語作品である（以後、『エヌマ・エリシュ』の
 行数を指す場合、ローマ数字は書板、アラビア数字は行を指す）。この物語作品
 (5) の末尾を飾る VI 121-VII 144 において、マルドゥクは、合計50を数えるその
 (6) 様々な名前と共に賛美される。そして、この賛美は、具体的には各名前の後に、
 当該の名前を説明する称号を付与することによってなされる。一例として、『エ
 ヌマ・エリシュ』 VII 3 にあるマルドゥクの名前の一つアサルアリムのケースを
 挙げよう。

^dAsar-alim šā ina bīt (Ē) mil-ki kab-t[u] šu-tu-ru mi-lik-šu

アサルアリム、議会（「議論の家」）において重要な者、その議論は卓抜してい
 る者

神名に続く称号が、当該の神名を説明する。これらマルドゥクの名前と称号
 には、古代の神学者も多大な関心を抱いていた。ニネヴェ出土文書の中から、
 『エヌマ・エリシュ』第 6、7 書板におけるマルドゥクの名前と称号の相互関
 (7) 係を説明する注釈文書が見つっている。例えば、上に引用したアサルアリム
 (8) の称号に関する注釈は以下の通りである。

^dAsar- alim アサルアリム
 [(x)] sa = bi-i-tā 家

sá	= mil-ku	議論
alim	= kab-tu	重要
sa	= at-ru	秀でる
sá	= mil-ku	議論

この通り、『エヌマ・エリシュ』に言及される説明的称号の構成要素と神名の構成要素の対応関係が表の形で挙げられる。しかし、神名後半の構成要素 **alim** を *kabtu*「重要」と訳す項目以外、奇天烈である。他の項目では、神名前半の構成要素 **asar** から /sa/ という音節のみが抜き出され、さらにこれが同じ音をした様々な語と関係づけられている。現代の文献学から見れば、ここで提案されている説明的称号は当該神名の語源とはとても言えないが、古代の学者は、訳出された意味を当該の神名の中に読み取り、それによって表象される性格を見出したようだ。『エヌマ・エリシュ』第6, 7書板の構成と文体は、マルドゥクの所有する様々な性質が、説明的称号の形で表された「意味」を内包する各神名によって体现されるとする神学を明示する。

本稿では、マルドゥクの名前を説明する称号のうち、今まで見逃されていた事例を取り上げて論じたい。それは、シュイラ (Šuilla) と呼ばれるシュメル語祈禱ジャンルの一祈禱 **ur-sag úru ur₄-ur₄**「勇士, 逆巻く洪水」に登場する名前と称号である。マルドゥクに捧げられた当該祈禱においてこの神は上述『エヌマ・エリシュ』にも登場するその様々な名前でもって呼びかけられており、さらに、各神名と共に、それぞれの神名を説明する称号も言及されている。本稿では、これら神名と称号の関係を分析する。さらに、問題となる神名と称号が当該祈禱に言及されるに至った背景について考察する。

II. シュイラ祈禱 **ur-sag úru ur₄-ur₄**「勇士, 逆巻く洪水」

まずシュメル語シュイラ祈禱 **ur-sag úru ur₄-ur₄** について解説したい。文字通りには「挙げられた手」を意味するシュメル語の言葉シュイラ (*šu-fl-la*₍₂₎) は、祈禱ジャンルを指す語の一つである。数多くの写本とともに広く知られる、呪術師 (*āšipu*) によって唱えられたシュイラ祈禱の他、祭儀歌僧 (*kalū*) によって唱えられたシュイラ祈禱がある⁽¹²⁾。大半がアッカド語で綴られた呪術師のシュイラ祈禱とは異なり、この祭儀歌僧のシュイラ祈禱は、エメサルと呼ばれた

シュメル語の変種の語彙を多用したシュメル語で綴られている。⁽¹³⁾そして、バラグ (Balag), エルシエマ (Eršemma) エルシャフンガ (Eršahunga) とともに、エメサル祈禱四大ジャンルの一角を占める。⁽¹⁴⁾以下、シュイラ祈禱とは、専らこの祭儀歌僧のシュイラ祈禱を指す。ニネヴェの書記によって前7世紀に作成されたエメサル祈禱大カタログによれば、合計47のシュイラ祈禱が当地において知られていた。⁽¹⁵⁾このカタログによれば、マルドゥクに捧げられたシュイラ祈禱は二つあった。**mu-LU é-a ku₄-ra-zu-ta**「主よ、あなたが社に入られた時」、そして **ur-sag úru ur₄-ur₄**「勇士、逆巻く洪水」であり、⁽¹⁶⁾両祈禱ともその写本が見つかっている。⁽¹⁷⁾

ur-sag úru ur₄-ur₄ の写本は計三点知られている。おそらくバビロンに由来すると考えられる写本二点とアッシュルに由来する写本一点である。⁽¹⁸⁾祈禱文書のエディションは、J. S. クーパー (Cooper) によって出版されている。⁽¹⁹⁾祈禱の中間部分に欠損部があるが、合計37から39行ほどになると考えられるこの祈禱のおおよそは復元できる。以下に本文を引用しながら、祈禱の文書を紹介しよう。

まず祈禱は、第1行から第15行まで続くマルドゥクへの呼びかけの連禱に始まる。ここでは、祈禱第1行の **ur-sag úru ur₄-ur₄ kuš₇-su ki-bal-a**「勇士、逆巻く洪水、敵国を踏みつぶす者」が部分的に畳句として繰り返される。すなわち、第二行以降 **ur-sag**「勇士」の位置にそれぞれマルドゥクの名前や称号が挙げられ、それに続き **úru ur₄-ur₄**「逆巻く洪水」と **kuš₇-su ki-bal-a**「敵国を踏みつぶす者」が交互に繰り返される。このうち、第2行から第9行においてマルドゥクはその異名と説明的称号でもって呼びかけられる。

1	[ur-s]ag úru [u]r₄-[ur₄]
[q] ar-ra-du a-bu-bu a-ši-šu	[kuš₇-su ki-bal]-[a]
[sa ⁷ -p] [i-in māt (KUR) nu-kūr-tim]
2	[u]r-sag ^dAsal-lú-ḫi
[q] ar-ra-du Marduk(^d AMAR.UTU)	úru ur-[ur]
a-bu-bu a-[ši-šu]
3	[ur-sag]^dAsar-alim-nun-na
[q] ar ^r ra ^r -[d] u ^d MIN	kuš₇-su ki-ba[l-a]
sa-pi ^r -in māt (KUR) ⁿ [u-kūr-tim]
4	[^dAMAR.UTU] ^ršita^r sag-[gi^r]-a
^d MIN kak-ku ^r la ma-ḫar ^r	[^rúru] [(空白)]
[^r MIN] [(空白)] [(空白)]
5	umun [^dEn^r-bi-lu-lu	[kuš₇]- [(空白)]

<i>be-lum</i> ^d MIN ⁷	MIN (空白) [(空白)]
6 ^d Tu ¹ -tu umun na-ám-ti-la	úru (空白) [(空白)]
^d MIN <i>be-lum ba-la-tu</i>	MIN (空白) [(空白)]
7 ^d Ša ¹ -zu umun ša-ab sù-ud-da	kuš ₇ - (空白) [(空白)]
^d MIN <i>be-lum ša lib-ba-a-šú ru-ú-qa</i>	MIN (空白)
8 ^r umun ^d Sirsir ¹	úru (空白)
^r <i>be-lum</i> ^d MIN	MIN (空白)
9 umun- ^r e ¹ kur- ^r ra a ¹ -ab-ba	kuš ₇ - (空白)
<i>be-el ša-di-i u ta-ma-tim</i>	MIN (空白)
- 1 勇士，逆巻く洪水，敵国を踏みつぶす者
 - 2 勇士アサルルヒ (akk. マルドゥク)，逆巻く洪水
 - 3 勇士アサルアリムヌナ，敵国を踏みつぶす者
 - 4 マルドゥク，無双の武器，(逆巻く) 洪水
 - 5 主エンビルル，(敵国を) 踏みつぶす者
 - 6 トットゥ，生命の主，(逆巻く) 洪水
 - 7 シャズ，心が深遠である主，(敵国を) 踏みつぶす者
 - 8 主スィルスィル，(逆巻く) 洪水
 - 9 山と海の主，(敵国を) 踏みつぶす者⁽²⁰⁾

第16行以降の祈祷中間部には，連祷ではなく自由な文体で綴られたマルドゥクへの賛美の呼びかけが続くが，この中間部は全ての写本において破損もしくは欠損しており，その詳細はまだ分からない。特に第21行の後，2行から4行程度，欠損部がある。この欠損部の後，祈祷は全く異なる内容の後半部を迎えている。ここではマルドゥクに，その都市と神殿を破壊した敵対者に対し復讐を果たし，これを殲滅するよう懇願する文章が祈祷の末尾まで続く。特に以下の一節においてこの祈願は明確に綴られる。

1' ^r mu ¹ -LU úru- ^r zu ab- <u>hul</u> ¹ -[la (/a) (-aš)]	^r a-gin ₇ ¹ b[a- -lá (-en/-e)]
<i>ana ša ālka</i> (URU-ka) <i>ú-šal-pi-tu</i>	<i>ki-i t[a-qūl (/ -qāl)]</i>
2' mu-LU é-zu an-pel-lá-aš	ta-aš m[i-ni-in (?)]- ^r gi ¹
<i>ana ša bītka</i> (É-ka) <i>ú-qal-li-lu₄</i>	<i>mi-na tuš-<u>ha</u>-re-er-šu</i>

3' **é zi é-zu-gin₇ rib-ba**

bitu (É) ki-nu šā ki-ma bitika (É-ka) šu-tu-qu

me-e ma-ra-an-dū-a

e-ka-a[「]am i[」]-ba[「]aš[」]-ši-ka

4' **úru zi úru-zu-gin₇ rib-ba**

ālu (URU) ki-nu šā ki-ma ālika (URU-ka) šu-tu-qu

me-e ma-ra-ma-ma

e-ki-a-am i-ba-āš-ši-ka

5' **mu-LU sag a-ra-an-gíd-da**

šā i[」]-i-ru-ka

á-zu la-ba-ra-è

ina i-di-ka a-a ū-ši

6' **mu-LU sag a-ra-an-mar-ra-aš**

ša i-hi-šu-ka

ki-za nam-ba-an-tùm

it-ti-ka a-a it-bal

7' **é-bi úru-bi du₆-du₆-da-aš**

bissu (É-su) u ālu (URU-šu) ana ti-li

un-bi líl-lá-aš ū-ba-e-mar

ní-ši-šu ana za-qí-qí te-er

8' **「šú[」] úru-za ù-bí-gi**

「gi[」]-mil-li ālika (URU-ka) ter-ma

ka-nag-gá u₆ ì-e-a

ma-a-tu li-mur

9' **šu[「]é[」]-za ù-bí-gi**

「gi[」]-mil-li bitika (É-ka) ter-ma

ka-nag-gá u₆ dè-è-a

ma-a-tu li-ib-ri

1' あなたの都市を破壊した者に対し、あなたはどのようにして [黙って] いたのですか？

2' あなたの社を辱めた者に対し、あなたは何故沈黙していたのですか？

3' あなたの社ほど偉容を誇る正統な社を、あなたのため何処に建てるというのですか？

(akk. あなたの社ほど偉容を誇る正統な社が、あなたのため何処に在るというのですか？)

4' あなたの都市ほど偉容を誇る正統な都市を、あなたのため何処に築くというのですか？

(akk. あなたの都市ほど偉容を誇る正統な都市が、あなたのため何処に在るというのですか？)

5' あなたに突進して来る者が、あなたの腕より逃れることがないように。

6' あなたに立ち向かう者が、あなたの場所にもう何一つ奪い取ることがな

いように

(akk.あなたに突撃して来る者が、あなたから何一つ奪い取ることがない
ように)

7' 彼奴の社と彼奴の都市を廃墟へと、彼奴の人民を亡霊へと変えてくださ
い！

8' あなたの都市の復讐を果たしてください！それによって、国土が驚き省み
るように！

9' あなたの社の復讐を果たしてください！それによって、国土が驚き省みる
ように！⁽²¹⁾

この祈祷が唱えられた祭儀的脈絡を明言する資料はまだ見つかっておらず、それを扱った研究も発表されていない。しかし、幾つかの状況証拠は、バビロンにおいて第1月に行われたマルドゥクのアキトゥ祭、いわゆる「バビロンの新年祭」の期間中、第1月8日に当該の祈祷が唱えられた可能性を示唆する。まず、これまで知られている限り、シュイラ祈祷は、諸都市の神殿において行われていた重要な年間祭儀、特に各神殿の最重要祭儀アキトゥ祭における行進に際して唱えられていた。そして、当該の祈祷と対を成すマルドゥクのシュイラ祈祷 **mu-LU é-a ku₄-ra-zu-ta** が「バビロンの新年祭」において唱えられていた。⁽²³⁾「バビロンの新年祭」の期間中、第1月8日から11日にかけて、マルドゥクの主神殿エサギルとバビロン市の北の郊外にあったアキトゥ祭殿をマルドゥクなどの神像とバビロン王が共に往復する行進式が執り行われていた。この内、11日に行進がアキトゥ祭殿からエサギル神殿に帰還した際、シュイラ祈祷 **mu-LU é-a ku₄-ra-zu-ta** は唱えられた。様々な資料より、「バビロンの新年祭」は『エヌマ・エリシュ』の文脈の中で解釈されていたことが知られている。⁽²⁴⁾エサギル神殿とアキトゥ祭殿間を往復する行進は、往路がティアマトとの戦へ赴くマルドゥクの進軍、そして帰路がマルドゥクの勝利の凱旋として解釈されていた。また、行進の目的地、アキトゥ祭殿ではマルドゥク像がティアマトという名の台座の上に乗せられ、それをもってマルドゥクのティアマトに対する勝利と解された。上述の通り当該祈祷の後半部では、敵対者の殲滅が懇願されるわけだが、これは敵対者への復讐と呼ばれる。そして『エヌマ・エリシュ』におけるマルドゥクのティアマトに対する戦もまた復讐と繰り返し呼ばれる。⁽²⁵⁾現時

点では推測に留まるが、当該のシェイラ祈祷が、それと対を成す祈祷 **mu-LU é-a ku₄-ra-zu-ta** の朗詠に先立つ 8 日の行進において、ティアマトとの決戦に向かうマルドゥクを鼓舞するため唱えられた可能性は高い。

III. **ur-sag úru ur₄-ur₄**「勇士，逆巻く洪水」におけるマルドゥクの名前と称号

III. 1. 神名と称号の分析

上述の通り，祈祷第 1 行から第 9 行にかけてマルドゥクは，合計 7 種類の異名でもって呼びかけられる。アサルルヒ（第 2 行），アサルアリムヌナ（第 3 行），マルドゥク（第 4 行），エンビルル（第 5 行），トゥトゥ（第 6 行），シャズ（第 7 行），そしてスィルスィル（第 8 行）である。これらの名前は、『エヌマ・エリシュ』第 6–7 書板に登場するマルドゥクの 50 の名前を構成する一部でもある⁽²⁶⁾。これら七つの名前のうち，マルドゥク，トゥトゥ，シャズに関しては，名前の言及の後，置句の前にそれぞれ称号が付与されている。さらに，スィルスィルについても，続く第 9 行に称号が挙げられている⁽²⁷⁾。これら説明的称号は，他の類例とは異なり，シュメル語で綴られてはいるものの，以下に解説する通り，ある神名から称号を導きだす方法は，『エヌマ・エリシュ』などの事例と同一である。

第 4 行には，神名 ^d**Marduk** (^d**AMAR.UTU**) の後に **šíta sag-gi-a = kakku lā mahār**「無双の武器」という称号が続く。この称号を分析する鍵は，神名表『アン＝アヌム』第 2 書板 193 行に見つかる⁽²⁸⁾。

^d**Mar-ru₁₀-^{gis}tukul** = *Marduk* (MIN) *a-bu^r-ub kakki* (^{gis}**TUKUL.MEŠ**)¹

マルトゥクル＝マルドゥク，洪水を武器とする者（「武器の洪水」）

引用した一節に登場する神名 ^d**Mar-ru₁₀-^{gis}tukul** が神名マルドゥクより導きだされたことに疑いはない。神名マルドゥクの前半の構成要素 /mar/ から **mar-ru₁₀** が，後半の構成要素 /duk/ から ^{gis}**tukul** がそれぞれ導き出された。**mar-ru₁₀** は古バビロニア時代以降 **a-ma-ru**「洪水」の変形として用いられており⁽²⁹⁾，(^{gis})**tukul** の方は「武器」を指す一般的な用語である。すなわち，この ^d**Mar-ru₁₀-^{gis}tukul** は，マルドゥクという名前を「洪水，武器」と解釈した結果

生じた。⁽³⁰⁾「洪水」は、神話におけるニヌルタの重要な武器であつた。⁽³¹⁾そしてマルドゥクがニヌルタの地位を引き継いだ後には、マルドゥクの重要な武器として⁽³²⁾認知されるようになった。このような背景より、名前マルドゥクの上述の解釈が生じたと言えよう。

『アン＝アヌム』に言及されるこの事例を基に当該祈禱に登場する称号 *šíta sag-gi-a* を分析しよう。まず、^(g15)*šíta* という語は、そのアッカド語訳 *kakku* も示す通り、「武器」を指す ^(g15)*tukul* の類義語である。*šíta* は、名前マルドゥクの後半部 /duk/ から、類義語 ^(g15)*tukul* を経由して導き出されたと考えられる (/duk/ > ^(g15)*tukul* > ^(g15)*šíta*)。それに続く構成部 *sag-gi-a* = *lā mahār* 「無双の」は、「武器」(^(g15)*tukul*, ^(g15)*šíta* = *kakku*) 並びに「洪水」⁽³³⁾(*a-ma-ru* 他 = *abūbu*) に付与される文学的定型句として文学文書に頻出する。これらの事実を踏まえて考えると、当該祈禱に言及される ^dAMAR.UTU *šíta sag-gi-a* は、マルドゥクの一般的な称号の一つ *a-ma-ru* (/ *mar-ru*₁₀) (^(g15)*šíta* (/ *tukul*) *sag-gi*₍₄₎-*a* 「洪水，無双の武器」の綴り方の変種（おそらくは高度に神学的な）と解することが出来る。⁽³⁴⁾

第6行には、^dTu-tu という名前が言及され、これに *umun na-ām-ti-la* = *bēl balāti* 「生命の主」という称号が続く。トゥトゥの同一の称号は、『エヌマ・エリシュ』にもその注釈文書にもまだ見つかっていない。しかし、*na-ām-ti-la* = *balāti* が ^dTu-tu の構成要素 *tu* に由来する可能性は高い。この構成要素から、*tu* (-*d*) = (*w*) *alādu* 「産む」という動詞を経由することによって導きだされただろう。⁽³⁵⁾ これを確証する類例はまだ見つかっていないが、『エヌマ・エリシュ』などの文書に登場する名前トゥトゥを説明する称号が主として生命に関するモチーフと深い関係にあることが間接的な補強になるだろう。⁽³⁶⁾

第7行では、^dŠa-zu という名前の後に *umun ša-ab sū-(ud-)da* = *bēlum ša libbašu rūqu* 「心が深遠である主」という称号が続く。*ša* (-*g*) のエメサル語形である *ša-ab* 並びにアッカド語の対応語 *libbašu* が名前 ^dŠa-zu の構成要素 *ša* に由来することに疑いの余地はない。しかし、*sū-(ud-)da* = *rūqu* の由来に関しては説明が要される。手掛かりとなる類例は、マルドゥクの名前に関する注釈文書の次の一節にある。⁽³⁷⁾

^dŠā.sū.zu = *mu-de-e libbi (ŠĀ) ilī* (DINGIR.MEŠ) *lib-bu ru-ū-qu*^{he-pī ēš-šū}

シャ (ス) ズ = 神々の心を知る者, 深遠な心^{新しい破壊部}

この一節における神名構成要素とアッカド語称号構成語の対応関係は明快である (^d*ilī*; ^d*šā* = *libbi* 並びに *libbu*; *sū* = *rūqu*; *zu* = *mūdē*)。着目すべきは, 神名中に *sū* (SUD = BU-*gunū*) が *zu* (ZU) と共に挙げられている点である。もちろん文字 SUD と文字 ZU は全く異なる外見をした別の文字である。しかし, ここではその類似した音価のため言及されている。おそらくは, 神名シャズの綴り方の変種として挙げられているのであろう。引用した一節は, 問題の語 *sū*-(*ud*-)*da* = *rūqu* が名前 ^dŠā-*zu* の構成要素 *zu* から導き出されたことを強く示唆する。さらに, 「深遠な心」が文学的定型句であることも指摘できる。当時の学者は, *sū* と *zu* の類似した音価を基に, この文学的定型句を神名シャズに発見したと考えられる。

第 8 行に言及される ^dSirsir という名前の後には称号が記されていないが, 前述の通り, 続く第 9 行に *umun-e kur-ra a-ab-ba* = *bēl šadī u tāmātī* (/ *tāmtī*) 「山と海の主」という称号が言及されている。これと類似したスィスィルの称号が『エヌマ・エリシュ』VII 70 にある。

^dSirsir *šā-pī-ik šadī* (KUR-*i*) *e-le-nu-uš Tī-amāt*

スィルスィル, ティアマトの上に山を積み上げる者

『エヌマ・エリシュ』のこの一文に関する注釈文書は, 著者の知る限りまだ見つかっていないが, 両称号を比較検討することにより, それぞれの構成語の派生過程を分析することが出来よう。まず, 引用した『エヌマ・エリシュ』中の称号に言及されるティアマト (その語源は周知の通り *tāmtu* 「海」), そして当該祈禱の称号における *a-ab-ba* = *tāmātī* (/ *tāmtī*) 「海」については, 神名 ^dSirsir を構成する文字 SIRSIR (BU*BU.AB) の構成要素 AB から「海」を指す一般的なシュメル語 *ab* を経由して導きだされた, と考えて問題はなかろう。引用した『エヌマ・エリシュ』の称号における語 *šāpīk* は文字 SIRSIR の別な構成要素 BU に由来すると考えられる。文字 BU には *sīr* という読み方がある。そもそも *sirsir* という文字と読みもこの *sīr* = BU から派生した。語彙文書あるいはバ

イリンガル文書において *šapaku* と同定されるシュメル語動詞の一つに **si** 並びに **sī** があるのだが、この動詞が **sīr** と類似した音価を持っていることが、上の称号において *šāpik* という語を用いさせる契機となったと考えられる。これは、天文学文書注釈の次の一節によって確証される。[S]ĪR *šā-pa-ku šā* IM.DIRI⁽³⁹⁾ 「SĪR は、雲に関する『積み上げる』」。難解なのは、引用した『エヌマ・エリシュ』の称号における *šadī*, そして当該祈祷の称号における **kur-ra**=*šadī* の由来である。しかしながら、神名スィルスィルの両方の説明的称号に *šadū* 「山」が偶然登場しているとは考えがたい。由来を説明する一つの可能性としては、例えば、シュメル語 **kur** 「山」がスィルスィルの /sir/ と比較的類似した音価を持っていることが挙げられよう。

上に引用した『エヌマ・エリシュ』におけるスィルスィルの称号は、さらに、称号 **umun-e kur-ra a-ab-ba**=*bēl šadī u tāmātī* の実質的な意味を明らかにする手掛かりも与える。「主」と訳した **umun**=*bēlu* は、言葉を代えれば「支配する者」と解することが出来、その意味で文字通りに訳出するのであれば、この称号は「山と海を支配する者」となる。引用した称号 *šāpik šadī elēnuš Tīāmat*, さらに『エヌマ・エリシュ』VII 70-77 におけるスィルスィルの他の称号は、ここで言う「海」が、神話における人格化された敵対者「海」、すなわちティアマトを指していることを示唆する⁽⁴⁰⁾。他方、「山」に関しては、確言できないものの、あるいは他の物語文書『ルガルエ』並びに『アンギム』などに登場する別な人格化された敵対者 **kur** 「山」を指していると解することも十分に可能である。⁽⁴¹⁾

III. 2. 神名と称号の宗教史的背景

以上、祈祷 **ur-sag úru ur₄-ur₄** に登場するマルドゥクの説明的称号の成り立ちについて論じた。以下、当該祈祷に、マルドゥクの異名と説明的称号が言及されるに至った背景について推察したい。まず、合計七つの神名のうち、上に論じた四つの神名にのみ称号が付与され、残り三つの名前、アサルルヒ、アサルアリムヌナ、エンピルルに称号が付与されていないことが恣意に依るとは考えにくいことが指摘できる。後者三つの名前がさらに別の名前アマルカム (**^dA-ma-ru-uk-kam**) と共にエメサル祈祷の連祷部分において言及されるマルドゥクの名前のスタンダードリストを構成している一方で⁽⁴²⁾、称号が付与されている四つの名前マルドゥク、トゥトゥウ、シャズ、スィルスィルは、これまで当該祈

禱以外のエメサル祈禱には見つかっていない特殊な名前である。編集史的に解説するのであれば、当該祈禱におけるマルドゥクの名前のリストは、マルドゥクの名前のスタンダードリストに、四つの特殊な名前を追加する形で構成されたと考えられる。そして、あえてこれら四つの特殊な神名にのみ説明的称号が付与されたと言えよう。

何故、当該祈禱においてマルドゥクはこれら四つの特殊な名前と説明的称号をもって呼びかけられているのであろうか。この問いに確証を持って答えることは出来ない。しかし、次のように推察することも出来よう。祈禱文書編纂の過程において祈禱の文句に機械的に組み込まれるスタンダードな神名リストが存在していた一方で、『エヌマ・エリシュ』第6-7書板に示されている通り、当時の神学的言説は、マルドゥクの様々な名前がそれぞれこの神の特定の性質を体現していたと論じる。これを踏まえて考えるのであれば、四つの特殊な神名の体現するマルドゥクの性質がこの祈禱において特に期待されており、それ故四つの名前がスタンダードリストに追加されたと解することも出来るのではないだろうか。そして、呼びかけられた名前の体現している性質をそれぞれ明確にするため、説明的称号を付与したのではなかろうか。祈禱後半部に展開されている通り、当該の祈禱が第一に敵対者への復讐を祈願するものであることに疑いはない。この祈願において期待されるマルドゥクの性質とは、祈禱前半の畳句に表象される敵を征伐する戦士としてのそれである。そして、上述の通り、ティアマトとの会戦に向かう進軍と解された第1月8日の行進式においてマルドゥクを鼓舞するために当該祈禱が朗詠された可能性もあるように、おそらくはこの神とティアマトとの神話的闘争が背景となっている。このようなマルドゥクの特徴が当該祈禱において期待されている特性の中でも最も重要なものの一つであることに疑いはない。そして、第4行の *AMAR.UTU šíta sag-gi-a = Marduk kakku lā maḥār*, 第9行の *umun-e kur-ra a-ab-ba = bēl šadī u tāmātī* がこれを正確に描写している事実は、上述の推測を支える。

注

- * 平成18年度文部科学省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である本稿は、著者による博士論文 D. Shibata, *Šuilla-Gebete im Emesal*, Dissertation Heidelberg, 2005 の一部を和訳し手を加えたもの。上記博士論文は現在出版準備中（以下、Shibata, *Šuilla*）。博士論文作成段階において、本稿に相当する部分を通読し、有

益な御批評を下された S. M. マウル (Maul) 教授, H. ウェツォルト (Waetzoldt) 教授, E. フラム (Frahm) 教授, さらに本稿作成時に重要なお指摘を下された山田恵子先生に心より深謝の意を表したい。

なお, 本稿における略称は, *Archiv für Orientforschung* 48/49, 2001/2002, 311-356 並びに 50, 2003/2004, 539-544 に基づく。

- (1) ジャン・ボテロ『メソポタミア文字・理性・神々』松島英子訳, 法政大学出版局, 1998年, 134-156頁を参照。
- (2) この伝統を最も顕著に伝えるのは, 宗教文書の注釈。古代メソポタミアの解釈学と注釈文書については以下の文献とそこに引用されている文献を参照。E. Frahm, “Royal Hermeneutics: Observations on the Commentaries from Ashurbanipal’s Libraries at Nineveh”, *Iraq* 66, 2005, 45-50; *id.*, *An Introduction to Assyrian and Babylonian Text Commentaries*, Guides to the Mesopotamian Textual Record, Münster (印刷中); A. Livingstone, *Explanatory Works*, Oxford, 1986.
- (3) 神殿や都市の名前の説明は, 特に, A. R. George, *Babylonian Topographical Texts*, OLA 40, Louvain, 1992 に収集されている文書に確認できる (特に pp. 71-81 の文書)。このような技法は, バイリンガル文書におけるシュメル語本文のアカド語訳においても用いられる。Cf. S. M. Maul, “Küchensumerisch oder hohe Kunst der Exegese? Überlegungen zur Bewertung akkadischer Interlinearübersetzungen von Emesal-Texten”, B. Pongratz-Leisten *et al.* (eds.), *Festschrift Röllig*, AOAT 247, Münster, 1997, 253-267.
- (4) 例えば, イシュム (L. Cagni, *Erra*, Roma, 1969, 58 I 2-4), ナブー (*LKA* no. 16; Lambert, B. Hruška & G. Komoróczy (eds.), *Festschrift Matouš* II, Budapest, 1978, 75-111, esp. 82ff., col. B 1ff.), アントゥ (Beaulieu, *OrNS* 64, 187-213)。
- (5) 『エヌマ・エリシュ』に関しては次の文献を参照。W. G. Lambert & S. B. Parker, *Enūma eliš*, Oxford, 1966; P. Talon, *SACT* 4, Helsinki, 2005; B. R. Foster, *Before the Muses*³, Bethesda, 2005, 436-486.
- (6) 名前の大半は『アン＝アヌム』などの神名表にも挙げられている。R. L. Litke, *An-Anum*, New Haven, 1998, 89-95, ll. 185-235; *ibid.*, 236f., ll. 107-112.
- (7) J. Bottéro, “Les noms de Marduk, l’écriture et la ‘logique’ en Mésopotamie ancienne”, M. de J. Ellis (ed.), *Finkelstein-Gedenkschrift*, Hamden, 1977, 5-28.
- (8) L. W. King, *STC* 2, London, 1902, Pl. 51ff. (Sm11+Sm980) +, obv. i, 11-16; Cf. Bottéro, *ibid.*, 6, 3.
- (9) シュメル語 **alim** は, 本来ウシ科のある動物 (あるいは想像上の動物) を指す語であったが, 神の称号として好んで用いられていたことから, 語彙文書やバイリンガル文書において頻繁に *kabtu* 「重要」と意識される (*CAD* K, 24f.)。
- (10) さらに, ここで挙げられている語同士の同定も一般的とはいえない。**sá** = *milku* は稀ながら幾つかの語彙文書に確認できる (cf. *CAD* M2, 66f.)。 **sa** = (*w*) *atru* におけ

る **sa** は **sa₅** の同音として挙げられている。(w) *atru* の一般的なシュメル語対応語は **diri** であるが、この **diri** に相当する文字 **SI.A** には **sa₅** という別の読み方がある (cf. *MesZL*, 87, no. 207)。

- (11) 当該祈禱のエディションは J. S. Cooper, “Warrior, Devastating Deluge, Destroyer of Hostile Lands: A Sumerian Šuila to Marduk”, E. Leichty *et al.* (eds.), *Gedenkschrift Sachs*, Philadelphia, 1988, 83-93 において公開されている。原物の校合に基づく全ての写本のハンドコピーと新しいエディションが, Shibata, *Šuilla* にて公開される。
- (12) 呪術師のシュイラ祈禱に関しては次の研究書とそこに挙げられている文献を参照。W. R. Mayer, *Untersuchungen zur Formensprache der babylonischen ‘Gebetsbeschwörungen’*, StP s. m. 5, Roma, 1976; A. Zgoll, *Die Kunst des Betens*, AOAT 308, Münster, 2003.
- (13) 呪術師のシュイラ祈禱にもシュメル語で綴られたものがある。例えば, C. Walker & M. Dick, *The Induction of the Cult Image in Ancient Mesopotamia*, SAALT 1, Helsinki, 2001, 135-144, ll. 49a-97; 146, ll. 1-4; 158-163, ll. 1a-20; 163-171, ll. 23a-65, S. M. Maul, *Zukunftsbewältigung*, BaFo 18, Mainz, 1994, 134-137, ll. 92-109a。ただし, これらの祈禱のシュメル語にエメサルの語彙は用いられない。
- エメサルに関しては M. K. Schretter, *Emesal-Studien*, Innsbruck, 1990 を参照。エメサルは, 社会階層と結びついた言語の変種 (sociolect) の一種と考えられており, 日本語の「女房言葉」のような女性の発話に特徴的な変種だったのではなかろうかと議論されている。
- (14) パラグ祈禱に関しては M. E. Cohen, *CLAM*, Potomac, 1988 を参照。エルシェマ祈禱に関しては *id.*, *Eršemma*, Cincinnati, 1981 を参照。エルシャフガ祈禱に関しては S. M. Maul, *Eršahunga*, Wiesbaden, 1988 を参照。エメサル祈禱の概観は J. A. Black, “Eme-sal Cult Songs and Prayers”, *AuOr* 9, 1991, 23-36 にまとめられている。
- (15) K 2529+3276+16853, iii 43-iv 29. K 2529 のハンドコピーは IVR², 53 において出版されている。原物の校合に基づくカタログ当該箇所の新しいエディションとハンドコピーは Shibata, *Šuilla* にて公開される。
- (16) K 2529+, iii 54f.
- (17) 祈禱 **mu-LU é-a ku₄-ra-zu-ta** については S. M. Maul, “Marduk, Nabû und der assyrische Enlil: Die Geschichte eines sumerischen Šuilas”, S. M. Maul (ed.), *Festschrift Borger*, CM 10, Groningen, 1998, 159-197 を参照。更に, 新写本を含む当該祈禱の新しいエディションとハンドコピーが Shibata, *Šuilla* にて公開される。
- (18) BM 59569, BM 34813+35731, VAT 11691.
- (19) J. S. Cooper, *Gedenkschrift Sachs*, 83-93.
- (20) 原稿枚数の制限よりコメントリーは省略する。各写本 BM 59569 (写本 A), BM 34813+35731 (写本 B), VAT 11691 (写本 C) の異読は以下の通り。1: B obv.1 **ur-**

- ur (erasure); 5: C obv.2' ^dbe-lu¹ ^dEn-^rbi¹-[lu-lu] 6: C obv.3' umun (over erasure); B obv.12 be-lum; C obv.4' ba-la (over "al"?)-^rti¹; 7: C obv.5' šā-ag^r sū¹-da; C obv.6' Šā-šā^r ru-qu¹ s[a-pi-in]; 8: C obv.7' [^dS]irsir_x (SUD*SUD.AB) uru₁₇ ur₄-u[r₄]; 9: C obv.8' kuš^r-su¹; A obv.18: KUR^ri u¹ []; B obv.18[be-l]um šā-di-i u ta-ma-tim; C obv.9' [] šā-di-i u tam-ti sa-[pi-in]
- (21) 7': B rev.3' ^rdē¹-x-^rmar¹; B rev.4'^rte¹-er-^rma²¹; 8': B rev.5' [d]ē-e; B rev.6' [ma-a]-ta; 9': B rev.7'^rū dē¹-e; B rev.8' ^rma-a-ta¹
- (22) この問題は Shibata, *Šuilla* において整理される。他、拙稿「戦の神の帰還——古代メソポタミアの祭儀におけるシュメル語シュイラ祈禱朗詠の役割」『史境』第53号、2006年、73-87頁も参照。
- (23) Cf. Maul, *Festschrift Borger*, 159-197.
- (24) Cf. A. R. George, "Studies in Cultic Topography and Ideology", *BiOr* 53, 1996, 363-395, esp. 376, fn. 32; W. G. Lambert, "The Great Battle of the Mesopotamian Religious Year: The Conflict in the Akitu-House", *Iraq* 25, 1963, 189-190; *id.*, "Myth and Ritual as Conceived by the Babylonians", *JSS* 13, 1968, 104-112; Livingstone, *Explanatory Works*, 156-158; Maul, *Festschrift Borger*, esp. 176f.
- (25) 『エヌマ・エリシュ』II 156, IV 13, VI 105, VI 163. Cf. W. G. Lambert, "Ninurta Mythology in the Babylonian Epic of Creation", K. Hecker & W. Sommerfeld (eds.), *Keilschriftliche Literaturen*, BBVO 6, Berlin, 1986, 55-60, esp. 58f.; S. M. Maul, "Der assyrische König - Hüter der Weltordnung", K. Watanabe (ed.), *Priests*, Heidelberg, 1999, 201-214, esp. 208.
- (26) アサルルヒ (VI 147), アサルアリムヌナ (VII 5), マルドゥク (VI 122), エンビルル (VII 57), トウトゥ (VII 9), シャズ (VII 35), スィルスィル (VII 70)。
- (27) 第2行の ūru ur-[ur] と第3行の kuš^r-su ki-ba[l-a] は畳句。
- (28) Litke, *An-Anum*, Pl. XII, col. iii 148 // CT 24, Pl. 27, obv. col. iii 28. Cf. *ibid.*, S. 91.
- (29) Cf. B. L. Eichler, "mar-URU₅: Tempest in a Deluge", M. E. Cohen *et al.* (eds.), *Festschrift Hallo*, Bethesda, 1993, 90-94.
- (30) アッカド語訳では, *kakku*「武器」は *abūbu*「洪水」に係る属格になっており, 文字通りには「武器の洪水」を意味する。*a-bu-ub* という綴りが status rectus *abūbu* ではなく status constructus *abūb* を指していることは, あるマルドゥクのアッカド語シュイラ祈禱にある類例 *a-bu-ub kakki* (^{giš}TUKUL) によっても確認できる (W. R. Mayer, "Das Ritual BMS 12 mit dem Gebet 'Marduk 5'", *OrNS* 62, 1993, 316, l. 23)。既にマイヤーも指摘しているように, この称号は, 他の文書に登場するマルドゥクの称号 *ša kakkašu abūbu*「その武器は洪水である者」と同様の意味に解することが出来るよう (Mayer, *op. cit.*, 330)。

なお, 『エヌマ・エリシュ』には, この神名 ^dMar-ru₁₀- ^{giš}tukul は登場しないもの

の、この神名を彷彿させる次の神名と称号が登場する。ša ina kakkešu (g^{is}TUKUL-šu) a-bu-bi ik-mu-u šā-bu-ti「その武器たる洪水によって敵対者達を拿捕した者」(VI 125, 神名 Marduk (dAMAR.UTU) の解釈), さらに dMa-ru-tu-uk-ku lu-ū tu-kul-tum ma-a-ti āli (URU) u niššū (UN.MEŠ-šū)「マルトウク、彼こそが国土、都市、そしてその民の信頼となるように」(VI 135)。これらの神名と称号が神名 dMar-ru₁₀- g^{is}tukul と関係している可能性は十分にある。あるいは、後に挙げた VI 135 の一文前半部が dMa-ru-tu-uk-ku-lu-ū, すなわちマルトウクル (Marutukkulū) という神名と解釈され、この読み方から神名 dMar-ru₁₀- g^{is}tukul が生まれたのであろうか。

- (31) J. van Dijk, *Lugale* II, Leiden, 1983, 53, l.82f.; *ibid.*, 175, l.689; J. S. Cooper, *Angim dimma*, Roma, 1978, 80, l.141f.; A. K. Grayson, RIMA 2, 194, A.0.101.1, l. 7; *ibid.*, RIMA 3, 182, A.0.103.1, col. i 10; D. O. Edzard, RIME 3/1, 33, E3/1.1.1.7.StB, col. v 37; *ibid.*, 78, E3/1.1.7.CylA, col. xv 24; *ibid.*, 92f., E3/1.1.7.CylB, col. vii 14 並びに viii 2; Cf. A. Annus, *The God Ninurta*, SAAS 14, Helsinki, 2002, 123-133.
- (32) 『エヌマ・エリシュ』IV 49, 75 並びに VI 125 において「洪水」(abūbu) がマルドウクの「武器」(kakku) として言及されている。さらに W. G. Lambert, “An Address of Marduk to the Demons”, *AfO* 17, 1954-1956, 313B1 の次の事例。KL.MIN (= anāku Asalluḫi) ša kakkašu abūbu ezzu「私はアサルルヒ、その武器は怒濤の洪水である者」。他, CAD A1, 79f. abūbu 3b の事例。この問題に関しては以下の研究も参照。Lambert, *Keilschriftliche Literaturen*, 55-60; T. Oshima, “Some Comments on Prayer to Marduk, no. 1, line 5/7”, *NABU* 2003, 109-111, no. 99.
- (33) Cf. CAD M1, 62b mahāru 3a2'. 他 van Dijk, *Lugale* II, 53, l. 83 も参照。さらに, lā mahār は, 神名 Marduk (dAMAR.UTU) の前半部から、その比較的類似した音価故に導き出された可能性もある ((a) mar > mār > ma²ār > mahār)。
- (34) 同様のマルドウクの称号には、例えば abūb kakki qabal lā [mah]ār「『武器の洪水』, 戦において無双」(Mayer, *OrNS* 62, 316, l.23) がある。
- (35) さらに, na-ām-ti-la の ti と dTu-tu の tu が持つ比較的類似した音価によって両者が橋渡しされている可能性もある。
- (36) 『エヌマ・エリシュ』VII 9-34, さらに King, *STC* 2, Pl. LXI (K 2107+6086), obv. col. ii' 21 を参照。
- (37) King, *STC* 2, Pl. LXII (K 2107+K 6086), col. ii' 28.
- (38) Cf. CAD R, 425a rūqu A 4.
- (39) C. Virolleaud, *ACh*, 4 Sin no. 3, l.11. Cf. CAD Š1, 415a.
- (40) 『エヌマ・エリシュ』VII 70ff. におけるスィルスィルの称号は、この神に関する古い神話を反映している可能性もある。Cf. B. Landsberger, “Assyriologische Notizen”, *WO* 1, 1947-1950, 362-376, esp. 362-366.
- (41) Cooper, *Angim dimma*, *passim*; van Dijk, *Lugale* II, *passim*; G. Farber-Flügge, *Der Mythos 'Inanna und Enki'*, StP 10, Rome, 1973, 22, I col. iii 6; *ibid.*, 24, I col. iv

6; *ibid.*, 56, II col. v 61. Cf. Cooper, *op. cit.*, 7f.

この称号を灌漑農業の領域と関係づけて解釈することも可能。事実、類似したマルドゥクの称号 *bēl nagbī šadī u[t] āmāti* 「山の源泉と海の主」が、灌漑農業に関係する脈絡にて言及されている (Mayer, *OrNS* 62, 316, l. 28; cf. T. Oshima, “Marduk, the Canal Digger”, *JANES* 40 印刷中)。しかし、メソポタミアの神話において辺境の敵対者の征服が春の洪水に基づく灌漑農耕の確立と密接な関係にあったことを忘れてはならない。特に、『ルガルエ』は、山岳の敵対者アサグの征服を灌漑農耕の確立と明確に関係づけて語る (van Dijk, *Lugale* II, 98ff., ll. 334-367)。

- (42) アマルカム, アサルルヒ, アサルアリムヌナ, エンビルルは次のエメサル祈禱に言及されている。K 5168+, obv. i 1'-4' // BM 38552, obv. i 1'-4' // *SBH* no. 20b, obv. 4'-7' (バラグ祈禱 **en zu sā mar-mar**); BA 5/ 5, no. 19 (=K 9270+K 9289)+, obv. 3-6 (バラグ祈禱 **umun še-er-ma-al-la aḫū**)。次の祈禱はアサルルヒとエンビルルのみを言及する。*STT*, no. 155, obv. 3-6 (エルシェマ祈禱 **umun-mu za-e**), *VS* 24, no. 22, obv. 4-5 // *TCL* 15, no. 11, obv. 24-25 (エルシェマ祈禱 **ur-sag gal me-ni še-er-ma-al-la il-la**); Maul, *Eršahunga*, 171, Ešh no. 24, (obv.) 6'-7' (エルシャフンガ祈禱); Maul, *Festschrift Borger*, 161, l. 2f. (シュイラ祈禱 **mu-LU é-a ku₄-ra-zu-ta**)。